史料室だより No.21　東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1984年3月1日

私のなかの東洋英和

―それにつながる断片的回想―

谷川　貞夫（元短大非常勤講師）

☆カナダミッションのこと

東洋英和と私とのかかわり合いは、はじめは間接的なことを契機とする。それは、大正11（1922）年にさかのぼる。この年は、私がカナダミッション（男子）宣教師P.G.プライス氏の主宰するセッツルメントや教会学校にかかわりをもった年である。時代はいわゆる"大正デモクラシー"の転換期であった。当時のカナダミッションは、形の上では一応男子と婦人とに分かれていた。いずれも"宣教"と"教育"と"社会福祉"とを一体的に実践していた。このカナダミッションは、その当時の教派としてはメソヂスト教会に属していた。後にカナダ合同教会となるのであるが、わが国では「日本メソヂスト教会」である。敗戦後の占領政策時代、G.H.Qの勧告によって、日本におけるプロテスタントの主要各派が合同して「日本基督教団」の結成となる。因に、「日本メソヂスト教会」は、系譜的には、アメリカ系とカナダ系の二つの流れがあった。このことは、わが国の教会や学校や社会福祉事業の中に、それぞれ沿革的につながりを同じくするもの、異にするもの、両者の協力によるもの等を派生することになる。

こうした系譜を知るものは、アメリカ系のものを"アメ・メソ"、カナダ系のものを"カナ・メソ"とも呼んでいる。しかし、現在そのような系譜や沿革を意識したり記憶するものはごく少いであろう。東洋英和は、私の意識や記憶の中では、まさしく"カナ・メソ"の系譜につながる学園で

谷川貞夫氏

ある。静岡英和、山梨英和も同じ系譜につながりをもつ。西では関西学院が"カナ・メソ"、東の青山学院は"アメ・メソ"とのかかわりが、歴史的、沿革的に色濃く見られる。かっての、日本メソヂスト教会にも同様の系譜につながるものが少なくない。

蓋し、私共の社会福祉施設はミッションと直結していた。わが国における社会福祉の発展過程から必然的現象であった。特に地域福祉増進への寄与を目的とするセッツルメントは、その領域の開拓的役割をその特質の一つとしていた。従ってボランティアとしての学生の協力は大きな動力であった。こうした意味から、青山学院や東洋英和、その他の学生の協力を受けることはその機能の具現に役立つからである。青学は神学部、英和は師範科から学生が派遣されていた。英和の師範科からの派遣学生は、我々のセッツルメントの日曜学校や児童

グループの教師あるいはリーダーとして協力していた。このことは間接的にもせよ英和とのかかわりを意味するということになる。その頃の英和学生の中には、予定日以外の日にも、余暇が出来ると訪ねてくるという熱心な者もあった。あの当時の派遣学生だった英和の才媛達も、いまはそれぞれの分野で指導者として活動していることであろう。

☆宣教師の人々

戦前、筆者がかかわりをもつようになった頃のこの国でのカナダ・ミッションの代表的立場に在ったのは、男子ミッションではマッケンジー博士（D.R.Mackenzie）婦人ミッションではミス・コーテス（S.R.Courtice）であった。この記憶は、私自身の面識の人々を中心とするので、誤っているかも知れない。

関東大震災によって下谷区下根岸（当時の区名）のプライス氏の住宅（施設も同じ場所に在った）も罹災した。同氏宅の別棟の一室を与えられていた私の持物もすべて焼失した。大正１２年９月１日（１９２３年）のことである。そのためプライス氏が移った小石川区上富坂の宣教師館の二階の一室で、翌年の一月から暫く過ごすことになる。当時、上富坂には男子宣教師館が在った。そこにはマッケンジー、アームストロング(R.C.Armstrong)プライスの諸氏が居住していた。婦人料理人のＮさんが"おでん"を作ってくれたり、"サンマ"を焼いてくれたことがあった。ミセス・プライスがそのにおいに堪えかねて、何事であるかと台所を見にこられて逃げ出したこともあった。Ｎさんは親切だが、気の強い婦人でミセス・プライスに「日本人の食物のにおいですよ」ときめつけたのには、これまた驚いた。ミセス・プライスは「そうですか、ごめんなさい」と弱気であった。ミセス・プライスは"えび"の天麩羅が好物であったが、喰べると必ずアレルギーが出るので極力避けていた。

１９６６年９月ワシントンでの国際会議からトロントを訪れる機会をもったとき、わざわざ二日間をかけて会いに来て下さった。ミセス・バット、ミセス・ストーンとも一緒に二日間を過ごした。次の機会には自分の宅へ来て泊るようにとのミセス・プライスの言葉であったが、先年９０才を越えて亡くなられた。プライス氏が家庭では夫人を「アーマア」と呼び、夫人はプライス氏（P.G.Price）を「パーシー」と呼ぶ。いづれも愛情をこめた呼び方であった。その呼び方の口真似は私は今でも自信がある。若いものの面倒をよく見る方達であった。われわれ悪童どもは、プライス氏を"おねだんサン"、ストーン氏を"お石さん"中央会堂に所属し、東大で哲学を講じておられたアームストロング博士を"たぢからをのみこと"、マッケンジー氏がミッションの財務担当であったことから"マケン爺"などと呼んだりしていた。

なつかしい人々である。日本におけるカナダミッションの中枢的人物であった。すべて故人となられた。

戦後３８年"アメ・メソ""カナ・メソ"の系譜を知る宣教師も殆んどないらしい。或る若い宣教師は、そうした歴史や系譜には関心はないと、はっきりと断言した。そうした系譜を顧みることは、むなしい回顧趣味であり、単なる郷愁に類するものらしい。沿革や歴史にとらわれないところに、若い人達の将来の新しい展望があるからであろう。だが、筆者は、かたくなに、私のなかのかつての東洋英和を、側面的で、断面的だが、回想し、追想し、それに重ねて、わがカナダ・ミッションへの郷愁を新たに深めるよすがとしたい。

☆ピアノと映画の夕

戦前の英和を知る人々の多くは、ミス・ハミルトン(F.G.Hamilton)、ミス・フルトンを忘れないであろう。お二人に対して、親しみをこめた意味で、ひそかに"ハミ・チャン"とか"トン・チャン"などと呼んでいる学生や卒業生がいた。親しみ深きよき時代であった。私がミス・ハミルトンとミス・フルトン(M.S.Fuller-ton)を知ったのは、愛隣団セッルメントの募金のための「ピアノと映画の夕」の開催を契機とする。

ふりかえると私の記憶では、大正14(1925)年の秋であったろうか。当時の青山会館を会場とした催しであった。私にとっては初めての経験。映画は名画と言われた「ベン・ファー」であった。ミス・ハミルトンとミス・フルトンがどんなピアノ曲を演奏されたかは覚えていない。たゞお二人の連弾は記憶のどこかにある。「ピアノと映画の夕」は盛会であった。プライス氏によれば、収益を目的としたものではなく、社会福祉の働きを広く社会の人々に理解してもらうことを目的とし、福祉への参加を意図するものであった。社会福祉のはたらきは、それに従事するものだけのものではなく、社会の人々の「理解」と「協力」と「参加」こそが必須要件なのである。プライス氏のこの理念は今日においても、社会福祉実践の基盤的意義をもつと私は信じている。

☆愛隣団セッツルメント

大正末期から昭和初期にわたる愛隣団セッツルメントでの私の職分は「社会教育部長」というのであった。肩書は立派だが、まったくの青二才であった。同時に、大学の研究室に在籍していた。「ピアノと映画の夕」が一応の成果を納め得たのは、英和関係の婦人達の後援によるものであった。この催しは、英和と私とのつながりを、具体的につけた契機の一つであったとの思いを、いまも持っている。当時、カナダ・ミッション(男子)の経営する社会福祉事業は、東京では日暮里、根岸及び吾嬬(関東大震火災後、東京府委託による)の三か所。婦人ミッションは亀戸で愛清館を運営していた。地方では、静岡や金沢等で児童福祉の事業がなされていた。さきに記したが、筆者が直接たずさわっていたセッツルメントの日曜学校、児童クラブは、英和から師範科(保育科)の学生が、教師またはリーダーとして派遣されて来ていた。このことによって、私どもは自づと英和とのかかわりを持っていたのであった。その頃の私の具体的な仕事は、夜間中学の校長、機関誌の編集、図書室の整備といったことで、自分にとって興味のあるものばかりであった。

福祉の実践と、教育のいとなみと、大学研究室での研究は、時には若干の軽重はあったけれども、以上の三つとは一体的にかかわりをもちつづけて今日に至ることになるのである。知友は三足のわらじと評する。因に、この間における東大研究室の在籍は、大正14(1925)年から昭和5(1930)年に至るのである。私にとっては、最も恵まれた時期であった。が、他面この時代は激しい変動の時代であった。当時における社会的諸現象、とくに治安維持法の公布、無産政党の台頭、金融恐慌、山東出兵等々とつづく大正末期から昭和初期の激動は、階級という新しい社会思想にかかわる問題を提起したのであった。そうした中で、わがセッツルメントが協力している労働学校では、若き日の三輪寿壮や河野密等が、労働青年を相手に気勢を上げていた。それらを見ながら、私は私なりに多忙であった。夜間中学では、昼間労働に従事する青少年を教室以外でも指導に当っていたからであ

る。

研究室での私の専攻は哲学と文化史であった。指導教授は得能　文、和辻哲郎両教授。私にとって、哲学と文化史は〝人間を学ぶ〟ことであり、〝人間を知る〟ことへの模索であり、それへの探求にほかならないとの思いによるものである。

福祉のはたらきを通して人々に接することも、教育のいとなみのなかで学生に接することも、研究室や学会で学究の論議をきくことも、それらはすべて〝人間を学ぶ〟ことにつながるものにほかならない。

何はともあれ、大正末期から昭和初期にかけては、各階各層にわたって新しい時代の波が押し寄せつゝあった。このような時期に、東京でのカナダ・ミッションの社会福祉関係の代表者は、P.G.プライス氏からG.E.バット氏に引継がれる。あれから半世紀以上を経過した今日、顧みると、今さらのように思われることは、プライス氏は私にとって父親的存在であり、バットさんは、いささか年令差のある兄貴的な人であった。敗戦直後、英和と私とを直接、具体的に結びつける役割をしたのは、プライス氏のあとを継いだこのバットさんなのである。そのバットさんのあとを一時的に担当したのは、かの洞爺丸で遭難したストーン（A.R.Stone）さんであった。ストーンさんは、仕事の上ではいわば私の弟分になる。彼は素朴で誠実、農村伝道に心をかたむけた人であった。

☆G.E.バット氏

不完全な私のメモによれば、バットさん（G.E.Bott）は、大正11（1921）年10月に来日。このことは、バットさんにとっては、新婚旅行を兼ねた日本への赴任であった。それ以来、戦争をはさんで、戦後、バットさんがこの日本で急逝されるまでの長い年月にわたって私の支援者であり、協力者であった。謙虚で誠実で、底知れぬ親切な人であった。彼の車が傷つけられたとき、相手の詫びに対して、自分がそのようなところに車を停めたのが悪かったと、逆にわびるバットさんであった。

あの日、真珠湾攻撃のニュースが流れたとき、バットさんと私とは一緒に銀座の交絢社の会議室での会議に出席していた。あのニュースを聞いたときのバットさんの悲しそうな顔を、今もまざまざと思い浮べる。悲痛に堪えかねたあの時の彼の面影が今も髣髴とする。

バットさんは、心から日本を愛し、平和を祈念した人であった。開戦となっても、日本にとどまることを切望した。しかし状勢はそれを許さなかった。

☆ララ救援物資

終戦の翌年、即ち昭和21（1946）年4月、バットさんは宣教師の日本復帰の最初の一人として来日。彼は「ララ救援物資」の代表の一人としての任務をもってである。ララ（LARA）とは〝Licensed Agency for Relief in Asia〟「アジア救援公認団体」の頭字をとった通称である。

彼はカナダ合同教会の宣教師であると同時に、「教会世界奉仕団」の代表であった。この団体は、〝ララ〟という世界的団体の強力な組織単位であった。私は「ララ救援物資」の目的と計画とを、バットさんの希望によって、その当時の厚生省社会局長葛西嘉資氏（後に厚生省事務次官となる）に伝えた。

つゞいてフレンドのエスタン・ビルド・ローズ女史（普連土女学園校長）、カトリックのフェルセカー神父、マッキロップ神父らが来日。厚生省葛西社会局長の尽力によって、はじめ2カ年の予

定の救援活動は、遂に７か年余にわたって「ララ救援物資中央委員会」の活動として展開されたのである。私もその中央委員の一人として、バット氏やローズ女史を助けることになる。敗戦直後の物資欠乏の混乱期に、７か年余にわたって、食料、衣料、医薬品等その他生活必需物資を、当初は、社会福祉施設を中心に、その後、学校その他家庭にまで救援を拡大。いわば、全国民的規模の救援活動にまでひろがっていったのである。そのため、バットさんは全国をかけまわった。ローズ女史もそうであった。私もしばしばバット氏やローズ女史に随行した。「ララ救援物資」の活動は、敗戦日本のために、全国民的規模の展開を示したが、今では殆んど忘れられているらしい。先般、或る民放の依頼で、戦後日本の社会福祉について、女性アナウンサーを相手に、ぶっつけ本番で対談した。たまたま"ララ救援物資"のことに触れた。彼女は少女時代に学校で"ララ救援物資"を受けたことを覚えているとのことであった。放送後、しばらく当時の思い出を話し合った。今は物資の豊かな時代である。あの当時の窮乏経験者がそれを忘れるほどのよき時代といえよう。だが、今もなお記憶している人のあるのを知って、そこはかとなく懐旧の情にかられる自分をかえりみて、時の流れを切実に感じざるを得なくなるのであった。ところで去る９月１８日の朝日歌壇に次の歌を見出した。そして、かの女性アナウンサーだけではなく、その他にも"ララ"への思いをもちつづけている人のあるのを改めて知ることが出来た。

ファッションの移れど忘れじララ物資の
セーターの暖かなりし感触　　斎藤ひまい

☆バットさん再び来日

バットさんが戦後来日されたのは、既に記したように敗戦の翌年であった。私事にわたるが、"あ

G．B．バット氏

の夏の日"をよすがとして私は、さまざまな思いを新たにする。あの日、天皇の玉音放送を国民は涙を流してきいた。３８年前の暑い夏の日、"８・１５"のことであった。あの日の前日(８・１４)、私は２歳８か月の末娘を疎開地で亡くした。翌"８・１５"はその娘を「ダビ」に付する日だった。煙を立ててはならないというので、村人はいろいろと気を配ってくれた。小さな　棺も村人の手造りであった。棺には野の花や村人の庭の夏の花が入れられた。あの日"８・１５"。茨城県の山ふところの僻村には、終戦の玉音放送は届いていなかった。この末娘が生きておれば４０歳になっている。だが、わがまなかいに浮ぶのはただ、幼い面影だけである。娘は永久に２歳８カ月である。ひとり息子の長男も、戦時中の勤労動員の疲労から発病し入院。終戦の翌年末、クリスマスの朝、日赤中央病院で若い命を閉じた。旧制中学４年生であった。敗戦直後の混乱のつづく中で霊柩車の手配がつかず、火葬場へ運ぶのに困惑した。まったく困却してしまった。その時である。バットさんが自分で役立つことならと、自らジープを運転して火葬場へ運んで下さったことを、いつまでも忘れない。この息子の告別式当日、遺骨を立教大学のチャペルへ運んでくれたのもバットさんであった。くりかえすことになるが、バットさんは心から日本を愛し、平和を求めた人であった。謙虚

で、素朴で、誰人に対しても底知れぬ親切そのものの暖かい人であった。憂いや悲しみの顔を見たことがあるが、怒った顔を見たことはない。接するものすべてを暖かく包む人であった。自然なままで、私共の意表をつく一面をもっていた。冬の夜、一緒に夜学を教えての帰り、彼の運転するオートバイのサイドカー(後にフォードに変わるのであるが…)で送られることが度々あった。そんな或る夜、彼の運転するオートバイに同乗しての帰途、寒いから「そば」を喰べようというので一緒にはいった。「そば」を注文すると同時に「おしんこ」を注文したのには、いささか驚かされた。彼は「たくわん」も好きだった。日本食は好みに合っているらしかった。もちろん天婦羅も寿司も好きだったが、ぜいたくはしなかった。早稲田大学での彼の講義料を毎月私達に分け與えてくれた時期があった。ミッションの会計に納入するかわりに、君の図書費の一部にせよというわけ……。ララ物資のはたらきで多忙なバット氏であったから、私は関係の社会福祉の運営のことは、なるべく配慮を煩わさないよう、専らララ中心に活動してもらうようにつとめた。

☆英和とのかかわり

昭和２１年の秋であったろうか、バットさんから私に、英和への出講について相談があった。多忙であろうが、英和での講義時間について考えられないか、とのことであった。彼は決して命令をしたり、押しつけたりする人ではなかった。戦争前には、青山学院神学部に阿部義宗先生の招きで、関西学院には神崎院長の招きと、プライス氏の指示で、かかわりを持ったが、戦後はメソヂスト系の学園には直接かかわっていない私であった。因に、バットさんは昭和１６年（１９４１）東洋英和の理事に就任している。だからバットさんは男子ミッションだけの人ではなかったのである。婦人ミッションから男子ミッションへの申し入れであることをも、氏はつけ加えるのであった。要は、東洋英和の保育科でも、社会福祉を学科目としてとり入れるからとのことであった。とにかく英和の責任者に会ってくれとのこと。これが、直接的に英和と私とのかかわり合いの契機となったのである。それまでのかかわりは、いわば間接的なものであった。

今はとりこわされたが、当時は青楓寮に旧保育科の教室があった。初めて訪れた保育科（青楓寮と同一建物）の玄関はうす暗く、陰鬱であった。受付けらしい玄関の一室には誰もいなかった。幾度か声をかけると二階から"女の子"が降りて来た。後でそれが"鎌倉ひるだ"さんであることを知った。「お待ちになっています。」と案内された二階の一室で、当時の保育科のディーンに面会した。その人がミス・レイマン（L・Lehman）であったか、誰であったかは、はっきりしていない。面接は出講の有無の相談ではなかった。早速、時間表を見せられた。それには「social service」と記して私の名が記入してあった。この呼称は英国流のものである。英国らしいと思った。アメリカ的だと「社会事業」は「social work」が一般的だからであるカナダは英国の流れを多く受けついでいたからであろう。現在は、「社会福祉」「social welfare」がより多く用いられている。こうして私は、英和と直接的なかかわりをもつことになったのである。以来、昭和５４年３月まで、３０数年間「六本木」というよりも、わがなつかしの「東鳥居坂」を歩くことになる。この間多くの才援に接し、将来の女史や女傑の青春時代にかかわりをもつ光栄に浴したわけである。長かったようでもあり、短かかったようでもある。あの頃の才援達は、いまやすぐれた指導性をもつ社会的存在となっていることであ

ろう。現在でも忘れずに便りをくれる卒業生があることはうれしいことだ。それらの人々の中から母校の教壇に立つ人も出るようになった。私は英和のみならず、関係する他の学園でもその卒業生の中から母校の教壇に立つ人を養成することをすすめている。

☆青楓寮時代の保育科

青楓寮時代の教室はうすぐらく、何となく老朽の記憶がよみがえる。しかし、かぎりなくなつかしい。既にとりこわされているから消滅したものへの愛惜の思いかも……。教室は二階だけだったと記憶する。うっかり行き過ぎると寮の寝室を兼ねた部屋にぶつかったりした。迷い込んで面喰らった記憶もある。今では、あたかもわがふるさとの思いすらする。青楓寮が存在していた頃、年次によっては、短大の教室から寮のクリスマス祝会などに招待されたこともあった。このこともすぐれてなつかしい思い出の一つである。家庭的雰囲気を感じとることが出来たからであろう。

☆短期大学設置

保育専攻部が短期大学になるに当って青楓寮の教室には私は忘れ難い思い出がある。東洋英和が短大設置の認可申請をした当時、私は「大学設置審議会」の委員でもあった。こうした委員は所管大臣の委嘱によるのが通例であったが「大学設置審議会」の委員は、所管の文部大臣の委嘱ではなく、任命権者は内閣総理大臣であった。私が受けた辞令には、「中央児童福祉審議会委員」辞令などにみる「委嘱」するではなく、「命ずる」とあって、「内閣総理大臣　吉田　茂」の名が記されてあった。各省の所管大臣名のものと同列視することなく、自重自戒をということらしい。

英和の短期大学設置申請に対して、担当の委員達が実地視察のため英和を訪れる日、当時の長野院長とミッショナリー保育科責任者の依頼によって、私は英和側の一員として視察委員達を迎えることとなった。委員達は私を見て意外だったらしく、少し驚いた様子だった。「先生はこちらの御関係ですか。」とさっそく問われた。同じミッション関係なので、出講している旨を話すと納得してくれた。委員の一人は微笑しながら言った。「あまり厳しい質問はできませんね。」と。私は「どうぞお手やわらかに…。伝統と実績と将来性をもつ学校ですから…。」と答えたことを覚えている。委員達はひと通りのことを尋ねた後、中高部、図書室、その他を視察して引揚げていった。その後、文部省で認可に関する委員会が開かれた。委員会では、英和に関する総括的な意見をあらためて私に求められた。4年制の法・文・経などの学科とちがって、保育科の短大認可基準は確立していなかった時期であり、その基準を設定する意味もあったので、審査は自づと厳しくならざるを得なかった。審査委員の一人としての私の総括的見解を求められたのに対して、凡そ次の諸点を挙げて英和に関する委員達の理解をうながした。即ち英和の保育科は、歴史的・沿革的に高く評価すべき実績を挙げていること、卒業生の斯界に於ける献貢度及び活動に見るべきもののあること、建学の精神が確立していること、将来性があることなどであった。且つ保育科を中心とする短大の認可は、英和をその基準乃至ものさしとすることが妥当であることをも、私見として加わえておいた。この私の総括見解及び私見を妥当なものとして委員達が受け入れるならば、英和の短大認可は必至ということになるとの確信があった。委員達は好意的且つ全面的に、私の総括見解並びに私見を受け容れてくれたのである。今となれば、いささか秘話めくが、自分ながら、英和のためにまことに

適切な総括見解をしたものだと思っている。保育科を中心とする短大の認可は、恐らく英和がその第一陣というか、当初のものに位置づけられるものであったと思っている。それは、英和の伝統とその将頼性への期待によるものであったであろう。あの当時、短大の新しい校舎も出来ていなかったし、図書館も整備されていなかった時だけに、当時に於ける英和短大の誕生は、他の同種の学園では驚異に値するものであったらしい。長野院長もこの認可は余程うれしかったと見えて以後、二年間ばかりは毎年卒業式や入学式の式辞の中に、短大誕生の一項を加えて私の名も挙げておられたほどである。英和に対する審議委員会での私の総括見解を、今もひそかに誇に思っている。われながら、公正かつ妥当で、その故に異議なく英和短大の認可を必至とする総括見解を示し得たからである。

☆保母資格取得

東洋英和の保育科が短大になることは、同種の他の学園よりも早かったが、「保母資格取得」のための「保母養成施設」としての指定を受けることは、随分遅れたといえる。「幼稚園教諭養成」の伝統を固守したかったからであろう。そのために卒業生や在校生は、かなりのマイナス面を背負ったことは明らかだった。私はこのハンディを補うために、卒業生や在学生の希望者に助言や指導をした。いわゆる「保母国家試験」なるものの試験委員をしているからである。ともあれ遅れたが英和の保育科も保母資格を取得した。保母資格取得のいきさつについては、別の機会を得ていささか秘話めくことなどをも含めて、記述したいと思っている。

☆幼保一元化

「幼保一元化論」は夙に戦前からの長い歴史的課題であって、近来またもや政治的にもとりあげられている。一元化は実現可能かどうか歴史的な課題でもある。ここに一つの問題提起がある。幼稚園教諭養成に比べて、保母養成施設では新しい分野への積極性を見せている。たとえば、心身障害児の積極的保育のみならず、老人福祉への保育機能の進出のごときである。そのためのカリキュラムが既にとり入れられつつある。私を研究責任者とする養成施設による研究グループは、厚生省の後援と三菱財団からの７００万円の研究費助成によって、一つの研究をまとめた。研究課題は「福祉需要の質的変化に対応する保母養成の先駆的実施に関する研究」がそれである。極めて大まかな言い方をすれば、幼稚園教諭の教育対象は就学始期まで二年乃至三年の幼児である。従来、幼稚園の多くは二年保育であって、三年保育を実施する園は比較的少なかった。最近三年保育を実施するのが増加する傾向を見せる動機は、卒直に言えば、教育理念もさることながら、むしろ経営問題によるものといえよう。全国的な児童の減少によるものである。この点、保育所も同様の問題をかかえている。だが、保育所は元来、幼児のみならず、乳児をも対象とする。東京都などでは、かの美濃部都政を契機として、更に零才児保育にまで年令低下を示した。「学童保育」も保育所の特徴である。今は「保母」は、心身障害児の保育はもとより、「老人福祉」の領域にまで保育機能の適応を意図するに至ったのである。その点、「幼稚園教諭」の対象範囲は狭い。「保母資格取得」のための短大のカリキュラムには、保母養成施設のそれに比して、福祉領域の学科目は少ない履習ですむのが、これまでの実状である。この点、英和は伝統的に意欲的ではないといえよう。幼稚

園以外の児童福祉施設で働くと否とにかゝわらず保育の領域は、幼稚園のみならず更に広いひろがりをもつことを学生時代から知っておくことを認識することが必要であろう。

英和が保母養成施設の指定を受ける頃、私は社会福祉系列の学科目は、すべて一人で引受けることになった。保育科長は関根文之助氏であった。私が担当した学科目は次のごとくであった。当時はまだ今日のように収約されたものではなく、細分化されていたからである。「社会福祉」「児童福祉」「ケースワーク」「グループワーク」「コミニュティオーガニゼーション」「法会福祉法制」「養護原理」「社会事業史」といった具合。その他に保育原理、教養課程に属するものがあるが、それらはこれまでの履習科目にあるから問題はなかった。ともあれあの当時は、厚生省の養成要綱に示す福祉関係の系列に属する上記のものは全部担当した。それらのうち「養護原理」以外の学科は、現在では、「社会福祉」Ⅰ・Ⅱ、「児童福祉の中に包括され圧縮されている。一科目は二単位が原則だったから、二年間でそれらの全部を一応、私一人でこなしたのだから、英和の財政的節約に若干の貢献をしたことになる。あの当時は、どの学園でもそれらの担当者を獲得するのに困っている時代であった。

☆バット氏の逝急

東洋英和と私とを具体的につなぐ役割をつとめたバット氏は「ララ救援物資」の活動による疲労によって急逝された。昭和２７年３月５日。ララの用務の途中、不快を感じ急ぎ帰宅し自宅のベットにたどりついた直後の急逝であった。その葬儀は、東洋英和女学院のマーガレット記念講堂で行われた。バットさんは「ララ救援物質中央委員会」の実行委員長でもあった。「ララの父」バット氏の急逝は、私達基督教関係のものだけではなく、ララの救援活動を知るものすべてが、衷心の哀悼を捧げた。すなわち、「ララ救援物質」活動に対して、国会では前後二回感謝決議がなされている。このことは、この国の国会としては珍らしいことであった。

☆セッツルメント

現在都下町田市に所在する児童福祉施設「バット博士記念ホーム」は、バット氏を記念する養護施設である。終戦直後、フィリッピンからの引揚孤児を引きとり、応急援護し、私が責任をもつ愛隣団セッツルメントに育児部を設けて収容していた。それらの子ども達に親しませたいというのがバットさんの願いであった。最初に収容したフィリッピンからの引揚孤児は極端な栄養失調であった。枯れ草色の顔色で頭髪がつっ立っていて、全身が痩せるのではなくて、逆にふくれていた。根岸のセッツルメントの建物から、世田谷に施設を新設して移転、更に現在は町田市へ移っている。当初から家族システムを堅持してきた。都下におけるモデル施設として注目されている。その初代園長は私が兼任した。現園長は四代目で少壮気鋭の士、かっての私の教え子の一人でもある。尤も当初のフィリッピンからの孤児は、すべて社会人となって活動している。フィリッピンからの引揚孤児につづいて、満州からの引揚孤児をも受容されることになったが、同じく栄養失調がひどいので、先ず救世軍病院で健康の調整をしてもらい、愛隣団の分園として船橋市津田沼のＯさん夫妻の希望により、夫人の実家に託すこととした。孤児達十数名を、救世軍病院から津田沼のＯ夫人の実家に送るためにジープの運転をしたのが、洞爺丸で遭難したストーンさんであった。付添って行ったのは私の家内であった。現在の社会福祉法人

「恩寵園」の養護施設がそれである。この児童福祉施設も千葉県下におけるモデル施設としての地位を占めている。

☆A・R・スートン氏

ところで後日、「バット博士記念ホーム」をセッツルメントの関係から分離して、新しい法人にまかせることに関して重要な委員会が、教文館ビルの9階で開かれるに当って、ストーンさんが責任者の私を援助するために北海道から出席されることになっていた。その日は終日の会議であったが、出席予定のストーン氏が定刻になっても、午后になっても見えない。そのうちに洞爺丸遭難のニュースがはいった。予定からすれば洞爺丸に乗られたにちがいなかった。夕刻まで随分気をもんだ。遂に悲報がはいった。三浦綾子の「氷点」のモデルは、ストーンさんだと私は信じている。ストーンさんはそういう人柄だったからだ。

バットホームに関する重要会議の日、それは洞爺丸遭難の日、即ち昭和29年9月26日であった。29年以前のことである。ストーンさんは、バットさんに代って、暫くわれわれの仕事に援助協力された方であった。ストーン夫人が英和にかかわりをもたれたのは、私の記憶では小学部だったように思う。

昭和27年バット氏が急逝されて2年半を経て、ストーンさんの洞爺丸での遭難死。私は心の支柱を失った。久しきに亘るカナダミッションの方々とのつながりは、いまや未亡人だけである。いづれも高齢である。それらの人々には先般、トロントでお目にかかったけれども、日本では無理であろう。そんな思いにふけっているとき、先頃、バットホームの理事会で、新しく理事に就任されたミス・G・オルソンがカナダミッションからの教師であることを知った。英和の中・高部で教鞭をとっておられるとのこと。久しぶりにカナダ・ミッションの人々のことを話し合った。ストーンさんは彼女の父上の先輩である由。来年度には若しかすれば、もう一人の派遣が実現するかも知れないが、確定的ではないとのこと、等々。

☆私の中の東洋英和

講義日が同じだったことから音楽の大中寅二先先と社会学の矢崎武夫氏（慶大）とは、いつも親しく駄弁ったことだった。大中先生は自分から三人組と呼び、いつも茶目っ気を発揮された。三人の中の最年長だったが、誰よりも気持ちが若々しかった。「悪童」をもって自任。矢崎氏は三人中の壮年、いつもお茶汲み役を引き受けていた。或る日、ふと「コーヒーがあるといいね」と言うと、大中先生が「心当りがある。」と控室を出て、瓶を手に。矢崎さんは「砂糖を探してきます。」というわけ。私はもっぱら恩恵に浴するのみ。三人が顔を合わす度に大中先生曰く「今日もまた悪い奴が揃ったネ。ぢゃあ、コーヒーを運んでくるか」と。その大中先生は今は亡き人。矢崎さんは、慶大に在職中と思うが、かなり早く英和への出講を止められたので、その後の消息は知らない。時にふれて思い出す英和の仲間だった。

亡き長野弥先生は、同じ「カナ・メソ」の流れをくむ中央会堂のメンバーだった。長野先生とは学生時代に同じ寮で過した時期がある。学生時代から真摯・謹厳・寡黙の紳士だった。寮の連中がストームをやって騒いだ時でも、超然と君子の態度であった。その頃から難聴の傾向があったと思う。いつももの静かで、丁重な態度を失わない方だった。だが時には茶目っ気ものぞかせる人だった。或る年次の卒業生の謝恩会で、一人の学生が「礼拝のあとの短かい時間に、弁当の半分を喰べることの美味しさを教えて下さった谷川先生に感

謝します。午食前の弁当のあのうまさを生涯忘れません。谷川先生ほんとうにありがとうございました。」とまじめくさって、謝辞を述べたのには、いささか虚をつかれた思いで、ビックリした。このことは、私の学生時代の美味求真による弁当美味化哲学だった。この学生の謝辞をきかれた長野先生、私の顔を見て、「谷川先生、やりましたネ。」と、ニヤリ。謹厳だがユーモアの判る方であった。長野先生は学窓を出るとすぐ英和の教師となり、その全生涯を英和の基礎づくりと、発展のために捧げ通した方であった。カナダ・ミッションと長いつながりをもつ、いわば生え抜きの一人であった。そうした人が次第に少なくなってゆく。寂しい限りである。

「私の中の東洋英和」は限りなく拡がってゆく — だが与えられた紙数は既になくなった。英和への講義日には、私はよく「鳥居坂へ行く」と言ったものだった。東洋英和女学院の所在地の地名が、かっての日は、麻布区東鳥居坂であったからである。鳥居坂と英和とは、私には一体的なものであったからだ。「鳥居坂」といえば「英和」を意味した。しかし、いまはこうした地名との一体感をもつものは殆どないであろう。「六本木」と「東洋英和」との一体感は成り立たない。「六本木」からは「英和」のイメージは浮かばない。「鳥居坂」へ行くというだけで、英和に結びついた一体感やイメージは、もはや私の回想のなかのものだけであろう。「六本木の学校」と言えば、英和の学生は明らかにいやな顔をする。六本木とアングラが結びつき、バアや夜の街を連想するからであろう。「鳥居坂」というだけで「英和」と「英和」といえば「鳥居坂」と結びついた時代は、既に終った。東洋英和の所在地は、そのままなのに、地名表記は鳥居坂ではなく、六本木である。英和のイメージと六本木のそれとはチグハグだ。異和感のみ。

保育科のルーツであり、それを育くんだ青楓寮にあった教室の建物は既に消滅した。カナダのミッショナリーを住まわせた宣教師館もなくなった。それらの所在した土地には高層ビルがそびえ立っている。短大の新しい土地も決定し、移転の準備も進捗しているときく。かっての東鳥居坂、なつかしい東鳥居坂に残るのは、幼・少・中・高となるのであろう。

発展という名と、伝統の誇りとをもって英和の短大は、かっての鳥居坂の地を離れて、新しいキャンパスへの移転が確定し、それへの一歩を踏み出したといえる。

私のなつかしい東洋英和は、これからも東鳥居坂略して、鳥居坂の地名と重なり合ったままに、生きつづけるであろう。（１９８３・１０・１０）

谷川貞夫氏紹介

履　歴（一部）

大14～昭5	東京帝国大学文学部研究室　哲学・文化史専攻
〃11～〃37	愛隣団セッツルメント総主事、常務理事
昭21～〃57	東洋英和女学院短期大学講師（兼任）
〃21～〃54	日本社会事業大学教授
〃22～〃46	早稲田大学教育学部、政治経済学部（併任）
〃22～現在	明治学院大学講師（兼任）
〃22～〃36	社会事業研究所長・現在社会福祉研究所長
〃23～〃29	大学設置審議会委員
〃23～〃36	立教大学文学部（兼任）
〃48～現在	社福法人京都基督教福祉会理事長

著書　社会福祉事業論稿 — 福祉実現への途を求めて — 緑蔭書房　1983　他多数

あとがき：本号は谷川先生から原稿を頂きました。厚く御礼を申し上げます。（短大　芝原　藤岡）

史料室だより　目次 No.１１～２０

No.１１　　発行　１９８１・３・１０

２０数年前のことを思いつつ　関根文之助

学友会・学生会の出発　丹羽　淑子

保育専攻部より短期大学となった頃　田中英子

「懐しき我が母校」　土屋　幸子

資料に見る３０年(1)　東洋英和女学院短期大学

史料室だより　目次 No.１～１０

No.１２　　発行　１９８１・７・１４

特集　明治期の学園生活　Ⅱ

林つる様の話、大堀しげ様の話

教科課程Ⅰ　明治４０年改正

幼稚科学学科課一覧表

教科課程Ⅱ　明治４０年改正

予科　本科　高等科

東洋英和女学校規則　明治四十年改正

No.１３　　発行　１９８１・１１・６

〈創立９７周年記念特集号〉

小学科のころ　清水　千代

〈座談会〉　上田朝先生・阿部光子先生・橋本佐喜子さんを囲んで

小学部校歌（小五　比屋根　智恵子作）

母校の思い出　橋本佐喜子

小羊１号「小学科の生立」より

教科課程表　明治４２年改正　（小学科）

〃　注・大正１４年頃のもの（　〃　）

東洋英和女学校規則　注・大正14年頃のもの

No.１４　　発行　１９８１・１２・８

別科－海外帰国子女の教育－秋山はる先生の話

小学科児童組別表、別科生の出身地

樫村辨市先生のメモから

別科生の思い出から　（中野　記）

No.１５　　発行　１９８２・３・１５

短期大学創設以来三十年

黒田成子・丹羽淑子（元本学教授）との懇談

資料に見る３０年(Ⅱ)　東洋英和女学院短期大学

No.１６　　発行　１９８２・１０・１

新井・水野先生のお話（大正～昭和２０年）

校歌のこと　中野登美子

東洋英和女学校校友会会則（昭和５年11月改正）

No.１７　　発行　１９８２・１１・６

東洋英和幼稚園新園舎（昭和７年）の頃

長野静江氏（柿の木坂幼稚園主任）のお話

「敬神・奉仕」の額の由来　長野　彌

最近収集した資料から

No.１８　　発行　１９８３・３・１４

小学科の思い出　外崎長三郎

三代つづきの英和の子　龍　闊子

中沢先生の思い出　田之上浜子

小学科の生活　佐々木敏子

No.１９　　発行　１９８３・７・１５

文芸部覚え書　水野富美子

文芸会の思い出　岡本　幸江

文芸会の思い出　山東　初子

文芸会－聖劇部と私　賀原　夏子

No.２０　　発行　１９８３・１１・６

東洋英和女学院母の会の歩み　木山　房子

三上かほる先生のお話より　（斎藤　記）